

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究(c)

研究期間：2007～2008

課題番号：19520400

研究課題名(和文) 景頗語・日本語の主題マーカーの対照研究

研究課題名(英文) On the Topic Marker in Kachin

— Viewed from the Perspective of Comparing It to Japanese “Wa”

研究代表者：

張 麟声 (ZHANG Linsheng)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：80331122

研究成果の概要：

まず、日本語との対照研究という角度から、景頗語の主題マーカーである「go<sup>1</sup>」の構文的分布を明らかにした。そして、それを踏まえて、主題マーカーと言語の語順との関係についてメスを入れ、SOV型言語に主題マーカーが生起しやすいということを確認し、その理由を論証した。また、主題マーカーとほぼ同じ構文的位置を示す「も」のような形式が、SOV型言語である景頗語、ウイグル語における構文的分布を記述した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：主題マーカー，対照研究，SOV型言語，SVO型言語，日本語，景頗語，古代中国語，語順

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現代日本語における主題助詞である「は」の意味・用法の共時的研究は、百年に近い研究史を有し、高いレベルに達している。だが、その本質についても、出自についてもなお異論があり、また、主題マーカーの普遍

的機能は何なのかなどの大きな課題はほとんど手付かずに残されている。これらの課題を総合的に解決するには日本語に似た他言語における主題マーカーのあり方を研究していく必要がある。

(2) 景頗語の主題マーカーの「go<sup>1</sup>」と日本

語の「は」は、次の4点において似ていることが知られている。

1. 主題を表す。ただし、対格が主題になった場合は、日本語と違い、対格マーカーが消えない。

2. 対比を表す。

3. 同類述語の省略を導く。例えば朝食のメニューを知った上で、「昼食と夕食は？」と聞くこと。

4. 仮定条件を表す。この場合、日本語では「は」ではなくて、「ば」になるが、この「ば」は「は」から転成したとされている。

しかし、次の大事な3点は未解決のまま残っている。

1. 日本語では、「象の鼻は長い」「牡蠣料理の本場は広島だ」のような言い方よりも、「象は鼻が長い」「牡蠣料理は広島が本場だ」のような「～は～が～」文が多用されるが、「が」のような主格助詞を持たない景頗語にもこれに似た現象、つまり、「～go<sup>1</sup>～〇～」文の多用が見られるか。

2. 日本語の「は」は、名詞述語文、形容詞述語文では無標で、動詞述語文では有標だ、言い換えれば、名詞述語文、形容詞述語文は基本的に有題文で、動詞述語文は基本的に無題文だと考えられているが、景頗語についてもこのようなことが言えるか。

3. 日本語では、「が」は新情報、「は」は旧情報を表すが、「が」のような主格助詞を持たない景頗語においても、「go<sup>1</sup>」は日本語の「は」のように、旧情報を表す機能を持つか。もしそうではない場合、つまり裸の形と「go<sup>1</sup>」がそれぞれ日本語の「が」と「は」の機能を果たしているのではない場合、景頗語において、名詞句の新旧情報を表し分ける文法手段はあるか。

## 2. 研究の目的

(1) まず次の3点を明らかにする。

1. 日本語では、「象の鼻は長い」「牡蠣料理の本場は広島だ」のような言い方よりも、「象は鼻が長い」「牡蠣料理は広島が本場だ」のような「～は～が～」文が多用されるが、「が」のような主格助詞を持たない景頗語にもこれに似た現象、つまり、「～go<sup>1</sup>～〇～」文の多用が見られるか。

2. 日本語の「は」は、名詞述語文、形容詞述語文では無標で、動詞述語文では有標だ、言い換えれば、名詞述語文、形容詞述語文は基本的に有題文で、動詞述語文は基本的に無題文だと考えられているが、景頗語について

もこのようなことが言えるか。

3. 日本語では、「が」は新情報、「は」は旧情報を表すが、「が」のような主格助詞を持たない景頗語においても、「go<sup>1</sup>」は日本語の「は」のように、旧情報を表す機能を持つか。もしそうではない場合、つまり裸の形と「go<sup>1</sup>」がそれぞれ日本語の「が」と「は」の機能を果たしているのではない場合、景頗語において、名詞句の新旧情報を表し分ける文法手段はあるか。

(2) 日本語に似た景頗語の主題マーカーである「go<sup>1</sup>」を丁寧に記述することによって、主題マーカーの本質に関する理解を深め、その生起のメカニズム、言い換えれば、どのようなタイプの言語に主題マーカーが生起しやすく、どのようなタイプの言語に主題マーカーが生起しにくいのか、そしてなぜそうなのか、といったことを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 日本語の「は」の研究において蓄積された記述的研究手法を用いて景頗語の主題マーカーを研究し、日本語の「は」と対照しながら、景頗語の主題マーカーである「go<sup>1</sup>」をきめ細かく記述する。

(2) 類型論的な考え方を導入し、日本語や景頗語のようなSOV型言語を研究する傍ら、中国語のようなSVO型言語における主題マーカーの存在の可能性も視野に入れ、主題マーカーと言語類型との関係を明らかにしていく。

## 4. 研究成果

(1) 景頗語の主題マーカーの「go<sup>1</sup>」の構文的分布などを丁寧に調べた結果、次の2点が分かった。

1. 日本語と同じく、景頗語にも「象は鼻が長い」のような主題文が多用される。もっとも、景頗語には「が」のような主格助詞がないので、文型としては、「～go<sup>1</sup>～〇～」という形になる。

2. 日本語と同じく、景頗語においても、主題マーカーは、名詞述語文、形容詞述語文では無標で、動詞述語文では有標になる。言い換えれば、名詞述語文、形容詞述語文は基本的に無題文である。もっとも、日本語と同じく、話し言葉では、景頗語でも主題マーカーはそれほど使われない。

一方、景頗語の主題マーカーの「go<sup>1</sup>」と新情報、旧情報との関係については、確実な結論が出せていない。物語においては、景頗語の「go<sup>1</sup>」は「が」と違って、初登場人物についても使われる。しかし、話し言葉におけるその使い方は、被調査者の答えに揺れが大きく、最終的な結論を下すことができなかった。今後、被調査者を増やし、調査の方法を改善することによって、再挑戦したいと思う。

(2) 景頗語について調査しているうちに、チベット語にも主題マーカーがあることを知り、2007年10月14日に、中日理論言語学研究会の第11回研究会として、「主題マーカーとSOV型言語」というテーマのシンポジウムを主催した。当日の発表者および発表テーマは次の通りであった。

野田尚史(大阪府立大学)「日本語の主題マーカー」

金善美(同志社大学)「朝鮮語の主題マーカー」

意西微薩・阿錯(中国南開大学)「チベット語の主題マーカー」

張麟声(大阪府立大学)「景頗語の主題マーカー」

このシンポジウムを通して、主題マーカーの存在が、SOV型言語という類型と論理的関係を持つ可能性があることを確認でき、また、同じSOV型言語でも、能格言語のチベット語では違う様相を呈していることが分かった。

(3) SOV型言語と主題マーカーとの関係を考えるかたわら、古い時代からSOV型言語との接触があったと考えられている中国語における主題マーカーの存在の可能性について、最古の文献、すなわち、紀元前800年～700年の間に成立したとされる『易経』、『書経』、『詩経』から調べることにした。3書における「者」と「也」の使用実態を調べた結果、その時代の書写体(つまり『易経』、『書経』)には、5つのものを指して「五者」と言っている一箇所以外に、「者」も「也」も使われていないことが分かった。一方、吟唱に用いられた『詩経』には、topic markerとしての用法を含めて、「者」も「也」も使われていることが明らかになった。もっとも、その使用位置の多様さから、この時期において、作者が細かい機能の別を深く認識してではなくて、ポーズを作るのにいろいろな位置に使っていたに過ぎないと考えられる。

さらに、紀元前500年～400年の間に成立したとされる中国の代表的な古典会話体である『論語』に使われる「者」と「也」の実例

を精査し、この時期に「者」や「也」のような主題マーカーが確実に成立したことが確認できた。また、この時期の古典中国語の主題マーカーは、主題を取り立てるのに使われるだけではなく、仮定節を取り立てるのにも使われる点で、日本語や張麟声(2004)において取り上げられている景頗語の主題マーカーや部分的には朝鮮語の主題マーカーにも通じていることが分かった。

(4) 日本語の「は」が「も」や「さえ」などのような「取りたて詞」と同じ構文的分布をなしていることを踏まえて、景頗語などのSOV型言語においても、「も」の語彙的意味に相当する形式は、英語などのSVO型言語における「to」のような副詞と違い、従属形態素として、名詞や動詞、形容詞の連用形などの後にくっついてはじめて使えるのではないかという仮説を立てた。そして、まず景頗語、それからウイグル語を使ってそれを検証した。その結果、主題マーカーを持つ景頗語だけではなく、主題マーカーを持たないウイグル語においても、日本語の「も」に相当する「MU」は、日本語の「も」と基本的な構文的分布をなし、むしろ、この種の取りたて詞の存在がSOV型言語とSVO型言語から区別する特徴であることが分かった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ①張麟声「景頗語の「mung」は助詞である—Jinpo語の助詞体系の構築に向けて—」, 大阪府立大学人文学会『人文学論集』第27集, pp37-45, 2009年03月, 査読なし.
- ②張麟声「日本語の「も」とウイグル語の「mu」についての覚書(1)」(夏迪娅・伊布拉音と共著), 大阪府立大学人文学会『人文学論集』第27集, pp 47-52, 2009年03月, 査読なし.
- ③張麟声「试谈《论语》中的话题标识“者”和“也”—借鉴日语语言学的研究成果进行汉语研究的一个尝试」, 『中国語研究』第50号, pp. 45-53, 2008年10月, 査読あり.
- ④張麟声「伝説文体に見られる景頗語(Kachin)の主題マーカー」, 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科『言語文化学研究 言語情報編』第3号, pp. 17-31, 2008年03月, 査読あり.
- ⑤張麟声「『易経』『書経』『詩経』における主題マーカーの『者』と『也』について」, 『中国語研究』第49号, pp. 42-48, 2007

年 10 月，査読あり。

〔学会発表〕（計 4 件）

- ①張麟声「Kachin “Mung” is a Particle—  
Toward Building of Particle System in  
Kachin」, 14th INTERNATIONAL HIMALAYAN  
LANGUAGE SYMPOSIUM, 2008年8月30日,  
University of Gothenburg(スウェーデン  
).
- ②張麟声「カチン語の『mung(も)』と『she(こ  
そ)』について」, 第13回チベット・ビル  
マ言語学研究会, 2007年12月8日, 神戸  
外国語大学.
- ③張麟声「On the Topic Marker in “Kachin”  
— Viewed from the Comparative  
Perspective with Japanese “WA”」, 13th  
INTERNATIONAL HIMALAYAN  
LANGUAGE SYMPOSIUM, 2007年10月22日,  
Indian Institute of Advanced Study(イ  
ンド).
- ④張麟声「景頗語の主題マーカー」, 中日理  
論言語学研究会第11回研究会, 2007年10  
月14日, 同志社大学.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

張麟声 (ZHANG Linsheng)

大阪府立大学人間社会学部教授

研究者番号：80331122